

海 (かいし) 市

No. 28

● 詩

02 横山 仁 生活の柄 (22)

04 前田 勉 忘れない

● エッセイ

08 細部俊作 モーム短編集から

11 佐藤ただし 水田とツバメ (26)

15 横山 仁 雑記 (28)

生活の柄（22）

横山 仁

朝

老母は窓をあけ

あたらしいのちにふれる

昼

老母は庭のイス*に腰かけ

活動するいのちをみている

夕方

老母は雨戸をしめ

折りたたみの机をひろげ

いのちをのせる

深夜

寝付けない老母は

テレビをつけている

やがて

音は消え

いのちの呼吸がきこえてくる

*イスといっても、一升瓶が6本入るプラケース。

忘れない

前田 勉

数えあげたことはないが

知っている言葉は消え続けている

忘れないように と

意識したものは多かったが

憶え続けることができたものは少ない

忘れない と

思ったことはそれ以上に多かったが

脳の領域から抹消されたものは限られている

嘘をつかないように と

社会に教えられてきたが

……小さな嘘はついてきた

諍いさかいがあつても

手をあげたことはなかったが

あげた手をおろす勇氣は持っている

つもりだ

その日の

その時間から

脅おそえながら

描いた虚構に埋没されないよう

どこかですくんでいるヒトがいる

言葉と思いの表裏を使い分け

独りよがりに憶えてきた幻想に溺れながらも

何も傷つくことなく

干かん戈かを交えるヒトがいる

アナタには

あげた手をおろす勇氣はないのだろうか

多くのおおくのオオクノ 人たち

多くのおおくのオオクノ 命！

多くのおおくのオオクノ 怒りと哀しみ

多くのおおくのオオクノ あるだけで幸せだった日常

多くのおおくのオオクノ 重ねてきた時間と記憶

多くのおおくのオオクノ 明日……

言葉にしきれない

当たり前すぎるはずだった

今日

や

明日

を

これ以上

人びとから奪ってはいけない

アナタの名前を

アナタの犯した事実を

ないがしろにされた人びととともに

動物たちとともに

草木や生きているすべてのものたちとともに

慣れ親しんだ生活のすべてのものたちとともに

忘れない

アナタには聞こえないだろうか

「この事態を引き起こしたのはあなただ。鏡を見ろ」

*フィンランド、ニーニスト大統領の言葉。

モーム短編集から

細部 俊作

「ジゴロとジゴレット（モーム傑作篇）」（サマセツト・モーム 金原瑞人訳 平成二七年新潮文庫）に収められた短編小説八篇はどれも面白かったが、そのなかから四篇とりあげてみた。

・キジバトのような声

「わたし」の、若い男性作家や女性元オペラ歌手との交友録のような印象だが、その人物評がなんとも率直で辛口。若い作家に対しては、たとえば「傲慢で育ちの悪い若者だ」、「とことん退屈な相手。ずうずうしい」と思っている。女性歌手については「頭が悪くて、中身の無い話をまくしたてる」と評し、あるときは面と向かって「冷淡で、とことん残酷で、生まれついて

の策略家で、だれにもまして利己的な女だ」と、なんとも歯に衣着せぬ見下したような物言いだ。一方の女性歌手の方は「わたし」のことを「先生」と呼ぶ。そう呼ばれたことで「わたし」がバカにされた気になるからという理由のようだ。また「わたし」のことをい・や・な・豚と呼ぶこともあった。いったい二人はどんな間柄なのだろう。ケンカしているわけでもなからうに、相手を傷つけるに十分な言葉を平気でいう。

歌手には友人で秘書でもある女性がいて、歌手は彼女を罵倒し、なぐり、怒鳴ったりするが、彼女がいなければやっていけないことを自覚している。その秘書は歌手を崇拜する一方で嫌悪している。こんな関係も驚きだ。

このような軽蔑や嫌悪の混じった感情の交差する関係が、終わることなくよく続いているものだと思うが、互いに相手を認め合い、受け入れられるところがあるのだろう。「わたし」と歌手は、結局のところ気の置けない友というべきかもしれない。

ある夜、長旅を終えた歌手からの一年ぶりの誘いで、海辺で食事をするようになった。昔話や男の話な

その後、星空の下で歌手が秘書の弾くピアノ伴奏で歌い始める。その歌声を「わたし」は最高の賛辞をもって書きとめる。歌手を辛辣に罵倒してきた「わたし」だったが、歌声には深く感動し、多くの言葉を重ねて賞賛する。この罵倒と賞賛という振り幅の大きさのせいでだろうか、読後の余韻が残るような気がした。「わたし」は「物わりのいい人間よりちよつと面倒な人間のほうが好きなのだ。彼女はいうまでもなくいやな女だが、あらいがたい魅力があるのはまちがいない」という。

欠点を辛辣に罵倒し罵倒され、かと思えば、美点を言葉を惜しむことなく費やして賞賛するという、いつてみればさばけた関係か。互いにおおらかというか無神経なところがあつて、その時の会話を愉しむことに長けているのだろう。ちよつと不思議なコク味のある物話だった。

・マウントドラーゴ卿

ひとりの政治家が、ある日精神科医のもとを訪れて、最近夢見が悪くて眠れないと相談する。夢で自分

が破廉恥なことをして、翌日、夢の中に出ていた男が自分の前に現れてその夢を知っているかのように振舞つて自分を嘲るといふ。そんなありえないことが何度も起きて、苦しいというのだった。荒唐無稽なストーリーだが面白かった。それは精神科医の自身を見る目がどこか懐疑的で客観的であるため、どこか現実味を保っているからではないかと思われた。

・サナトリウム

サナトリウム（結核療養所）では、病の軽い人は穏やかにしていれば施設内を自由に行動でき、三度の食事、ミニゴルフ、運動、決められた休息、けんか、嫉妬、噂、つまらないいらだちの毎日を過ごしている。施設それ自体が一つの人間社会の縮図として描かれている。

互いにけんか相手としかみない二人の男、見舞いに来る妻にひがみ感情をぶつける夫、結婚したいと思つている男女二人。彼らの愛や死を間近に見て患者たちの心が動いていく。

愛し合っている二人が医師に結婚できるかどうか

相談したところ、結婚生活は病巣を活性化させやすいので、一般的に余命は短くなる。特に病が進んでいる男性の方は余命二、三年のところ、結婚すれば半年くらいに縮んでしまうだろうと告げられた。その後、二人が出した結論はほかの患者たちすぐに知れわたり、多くの人に感動を与えた。ひがみ根性に染まっていたあの夫は、妻に、もう死ぬのは怖くない、死なんて愛にくらべればどうでもいい―と愛を打ち明けるのだった。愛は結核のように伝染する……てか。

・征服されざる者

第二次世界大戦中、フランス北部の町にドイツ軍が侵攻し、ある兵士が農家の娘をレイプする。その後、休戦中に兵士は何度も土産持参でその農家を訪れるようになる。やがて、両親は彼とうちとけてくるが、娘の方は敵意を解こうとしない。娘が妊娠すると、兵士は娘をいっそう愛するようになって、娘と結婚し、農家を継ぎたい、子どもを愛し、何でも教えてやりたいと夢を語り、両親はこれを歓迎する。娘にはドイツ軍の捕虜になった婚約者がいるが、収容先で死亡したと

の知らせが。娘は兵士に向かって言う。「わたしはこどもを見るたびに恥辱を感じる。ドイツ兵の子どもを連れてどんな顔をして生きていけばいいの」、「あなたは敵だ、これからも。自分が生きているのはこの目でフランスの解放を見たいから」、「私たちは負けた。でも、この戦争が終わる前に、私たちは征服なんかされていけないことを思い知らせてやる」。そして、子どもの生まれた朝、悲劇が起きる。

妻になること母親になることを拒んだ娘は、国としてのフランスと一体になったのだった。兵士には善良なところもあって、娘や家族を愛したいと心から思っていた。ハンスという名をもつ個人として。しかし、彼は、娘から個人であると認められることはなく（物語の中でもハンスと呼ばれることはなかった）、憎しみの対象としてのドイツ軍兵士であり続けるしかなかった。

水田とツバメ（二六）

佐藤ただし

・戦争と水田

二月二四日にロシア軍がウクライナに軍事侵攻し、キーウやマリウポリの街並みが破壊され、多くの市民が被害を受けている。その後も戦闘は止まず、ウクライナの隣国ベラルーシとの国境に近いチェルノブイリ原子力発電所の変電設備が攻撃され、世界を震撼させるようなことが起きている。このニュースをテレビで見、今から三〇年以上前のことだが、当時の西ドイツに行った時のことを思い出した。

秋田市は一九八四年に西ドイツのパスサウ市と姉妹都市を提携し、両国の交流を目的に数名の市民が交互に行き来していて、今もその活動は続いているようだ

が、その一員として一九八八年に二週間ほど西ドイツに行かせてもらったことがあった。最初はドイツ北部のデュッセルドルフに近いオルゾイという町に行き、ホームステイをしながら、その町の老人ホームや幼稚園、カジノに使われていた建物や教会などを見て回った。その後、ドイツを縦断するような形で南下し、次の目的地はオーストリアの国境に近いバードという町だった。その目的地に行く途中、州都ミュンヘンのあるバイエルン州に入ると、バスの車窓には広大な放牧地が広がり、はるか遠くに茶系の牛が放牧されて草を食んでいた。その美しい風景を見てみると、ガイドの日本人女性が、二年前のチェルノブイリ原発事故の影響で、ここに放し飼いにされている牛は食べる事ができないという話をした。ここはチェルノブイリから西に千数百キロも離れた場所であり、事故後二年を経過してもなお残る原発事故の影響の大きさに驚いた。

今回のロシア軍による原発設備に対する攻撃は福島原発事故のような、地震や津波などの自然的要因だけでなく、他国によりこうした設備が攻撃される危険があるということが分かり、世界の原子力発電設備は

安全とは言えなくなってしまった。プーチンの頭の中には、ロシアの領土や影響力を拡大させることしかない、地球は一つしかない惑星であり、軍事侵攻により得るものより、人の命や暮らしなど、失うものがはるかに大きいということが分からないようだ。

毎日のように報道されているウクライナの都市や戦場の様子を見ると、目の前に広がる、日本の田んぼの風景は別世界で平和である。この田んぼの中に、一本の鉄筋が入っているだけで、田植え機やトラクターは壊れるし、人も大きな怪我をする。最近は裸足で田んぼに入って田植えをする人もいないだろうが、私が子供の頃は裸足で田んぼの中に入っていた。農家に限らず近くで生活する人達も不要なものを捨てないという暗黙の了解が形成されていた。

日本は武力による戦争を放棄し、平和国家として戦後を歩んできた。そのことによる弊害もあるのかも知れないが、こうしていつでも田畑に出かけて仕事が出るのは、敗戦後、他国と武力による戦争をして来なかったからと言える。これがカンボジアのように、田

畑に地雷が埋められたりしていたら、農作業どころの話ではない。戦争で真っ先に被害を被るのはそこで生活する人達だろう。日本もロシアや北朝鮮に攻撃されることを念頭に、軍備を増強しなければならぬと、つい思ってしまうが、武力に頼らずに自立できる方法を考えなければならぬ。

今年は四月上旬から田起こしを始め、その後、代掻きや田植えをするために延べ三〇日程、トラクターや田植え機に乗っていた。今は町内の農事組合法人に入っているが、前は自分の家や親類に頼まれている田んぼの耕作で、トラクターや田植え機に乗っていたのは大体一〇日程だったので、単純に計算すると作業時間は三倍になる。

年々耕作面積が増えてゆくが、高齢のためだったり、病気や怪我でイネづくりができなくなり依頼されるケースが多く、初めて作る田んぼも少なくなっている。

そうした中で、Sさんの田んぼを代掻きした時はこの田んぼを作っていたSさんのことを思い出していた。

Sさんの家は雄物川の川向いにあり、親父さんが一ヘクタールちよつとの、この田んぼを購入して作っていたのだが、高齢になって農作業が出来なくなり、どうしようかとなった時、近くに住む次男が「俺が田んぼを作る」と言ったという。そして、東京に住んでいて、警視庁に勤務していた長男のSさんが仕事を辞め、家族を東京に残して単身で実家に戻り、田んぼを作り始めたという。そのSさんとは直接話をしたこと
はなかったが、家の畑の前に立っていると、軽トラックに乗って通り過ぎてゆく時、丁寧に頭を下げてゆくのだった。その姿を見ると、私と年恰好も似ていたので、おそらく仕事を辞めて、こっちに戻ってきたのは五〇代の半ば頃ではないかと思う。秋田に住む母親は、勤めを辞めてまで、こっちに來なくてもよいと思っていたというが、次男が農業をやると言ったとき、長男として任せる訳にはいかないと思つたのではないかと、私の母に話していたという。

そうして何年か田んぼを作っていたのだが、慣れない仕事のせいか両膝を痛めて手術をすることになり、耕作を依頼したのだった。

その田んぼは正方形に近い台形で、道路わきの排水路に沿って地表が下がっていた。そのため田植えをしても苗が水に沈んでしまい、多分、Sさんも気にかけていたことだろう。低いところに砂を入れるか、田んぼの高いところから、低いところへ土を運んで高低差をなくしてゆきたかっただろうなと思ひながら、代掻きをしていた。

ご存知の方も多いと思うが、宮本常一の「忘れられた日本人」の中に、土佐源氏という、めくらの乞食の話がある。その中に馬喰が百姓をだまして牛を売りつける場面がある。

「わるい、しょうもない牛を追うていって、『この牛はええ牛じゃ』いうておいてくる。そうしてももの半年もたつていってみると、百姓というのはそのわるい牛をちゃんとええ牛にしておる。そりゃ、ええ百姓ちうもんは神様のようなもんで、石ころでも自分の力で金にかえよる。」

牛に限らず、田んぼや畑の手入れをして少しずつ良くしてゆく。そうした営みがこの世界にはある。原発

事故や戦争で、こうした営みが破壊されるのは御免被
りたい。

雑記 (26)

横山 仁

菩提寺から送られてくる新聞（「同朋新聞」）2022年3月1日号）に、「がんと生きる人の伴走者として」というインタビュー記事があり、インタビュされる看護師は、秋田県出身の秋山正子さんで「第47回フーロレンス・ナイチンゲール記章を受章」とあった。以下、参考までに。

（引用開始）

また、身内を亡くされた方の話もお聞きします。ご遺族の悲しみは深く、「ああすればよかった、こうすればよかった」と、多くの方が後悔を語られます。その時は、ご本人がどう思っておられたのか、どう決めたのかというところに立ち戻ってゆっくり話をしま

す。「私がこうすればよかったと思っていたことは、本人が望んでいたことではなかったのですね」と気づかれて、「ほかの道があったはず。まだ、いろんなことができたはず」というストーリーが、「精一杯生きただけ、これでよかったのだ」という新たな物語に書き換える瞬間があります。後悔や悲しみをすべて払拭することはできません。ご遺族もまた、亡くなられた方の最期や一生を振り返ることで、これまでの自分の生き方を整理して、生きることを取り戻していかれます。

（引用終わり）

*

日本詩人クラブ広報「詩界通信」98号(3月31日発行)の「編集後記」でみつけたが、「広報」に、このようなアホらしい文章をかい、会員からクレームがこなかったのだろうか。個人誌や同人誌なら、書いた人を無知というか、sheepie (後述) として、相手にしなければいいだけだが。

(引用開始)

▼世界で信じられない事態が起きた。ロシアが隣国ウクライナに侵略戦争を開始した。武力で一方向的に他国の体制や秩序を壊して良いものか。激しい憤りを覚える。この戦争はプーチン氏の野望により始まったのであり、ロシア国民や国家の総意ではない。ロシア国内では戦争に反対する多くのデモ参加者が捕まり拘束されている。国際安保理はプーチン氏の蛮行に対し、決定的断固たる抗議をすべきだ。

(引用終わり)

(天野) という人は、アメリカがイラクやイランなどへ侵略したときも、「国際安保理」云々と、書いたのだらうか。ちなみに、クウェートがイラクの地下油田から勝手に石油をぬきとっていたことに対して、フセインは、アメリカに話をとおしてから、クウェートに攻め込んだところ、待っていたとばかり、アメリカのブッシュらはイラクに爆撃をしたという。(これは、次の及川幸久氏が街宣で話していた。)

前号で及川幸久氏を紹介したが、及川氏は、スペインの弁護士でウクライナへ入った人や、地元で発信しているユーチューバーらの言葉も解説している。スペインの弁護士の翻訳は、クリスタル・スペインさんがスペインから発信している。
また、日本でロシア語を教えているジェーニヤさんも、及川氏の番組に登場している。

「副島隆彦の学問道場」から。

(引用開始)

[3385] ウクライナに関するフェイス・ニュースを見破るために

投稿者：西森マリー

投稿日：2022-04-20 06:45:06

みなさま、お久しぶりです。

先ほど、ウクライナに関する副島先生やみなさんの

書き込みを読みました。この掲示板のおかげで日本でも真実が伝わっていることをとても嬉しく思っています。

私がこれから書くことは、常連の皆さんにとってはお新情報ではありませんが、ウクライナの真相を追究したくてネット検索をして、この掲示板にたどりついた normies（普通の人々）や sheeple（政府や大手メディアの言うことに従順する羊人間）には役立つ情報だと思うので、蛇足ながら取って投稿させていただきます。

私は大昔、複数のテレビ局で海外情報番組のリポーターやコーディネイターや、要人の海外視察のつき合いなどを仕事をしていました。当時、体験したことから、ウクライナのフエイク・ニュースを見破るために役立つであろう”やらせのセツティング”を思い出すままにいくつか紹介します。

+ 畑で働く人々に普段は着ないカラフルな服を着てもらった。

+ 1ヶ月も前からお膳立てをしていた結婚式の取材を、あたかも偶然結婚式に遭遇したように伝えた。

+ リポーターがたまたま街で出逢った人が非常に親切

な人で、リポーターを家に招いて夕食をごちそうしてくれた、というのは大嘘で、この人は現地のコーディネイターの知り合いで、ごちそう代などはテレビ局が支払った。

+ オランダのチューリップ栽培者の取材で、彼の畑から100キロ以上離れている風車が見える場所で風車をバックにインタビューをして、あたかもオランダには至る所に風車があるように見せかけた。

+ オランダの小さな美術館の取材で、アンネ・フランク記念館の前に並んでいる人々の行列を撮影し、つぎはぎの編集で、この美術館が行列ができる美術館のように見せた。

+ 要人が視察した小学校は、要人が訪れる教室だけ壁のペンキを塗り替え、それまで誰も見たことがなかった真新しいホワイトボードや教壇を設置した。要人が訪問したクラスは、その時だけ英語ができる子どものみを集めていた。要人に花を渡したのは、その小学校に通っていない政府関係者の娘だった。要人は、援助金が発立っていることを確信して帰国した。

もう時刻だとは思いますが、フエイク・ニュースの

仲間だった自分の悪行を深く反省しております！
ただし、ユリ・ゲラーの超能力は、スプーン曲げも、
テレパシーも全て本物で、やらせではありません！
(引用終わり)

経営科学出版『月刊アンダーワールド』事務局から
の講座宣伝メール 0408 より。follow the money.

アメリカの、他国への侵略がなかったのは、トラン
プ大統領時代だけである。

(引用開始)

「東欧の緊張が
我が社に利益をもたらすだろう...」

これは世界軍需メーカー大手、
レイセオン社の CEO
グレゴリー・ヘイズ氏の言葉です。

彼はウクライナ侵攻 1ヶ月前の
決算説明会でこのように発言し、
莫大な利益が見込めることを確信していました。

しかし、こう述べていたのは
実は彼だけではありません。

同じく世界軍需メーカー大手、
ロッキード・マーティン社の CEO
ジム・テイクレット氏も
この時期株主たちに、
同じ発言をしていたのです。

そして1ヶ月後、
彼らのこの発言をなぞるように、
ロシアはウクライナに侵攻し、
両社の株価は見事に急上昇。

「副島隆彦の学問道場」から。

今、アメリカの軍需企業は
儲かって儲かって

笑いが止まらない状況でしょう…

… ですが疑問に思いませんか？

なぜ彼らは、

ウクライナ侵攻が起こる

1ヶ月も前にあのようなことを

自信を持って株主達の前で

断言できたのでしょうか？

そこには、

政府と軍需企業の間

切っても切れない歪んだ癒着の存在
があるのです…

(引用終わり)

(引用開始)

ふじむら掲示板 [270] 詳報『ブチャヤの大虐殺を
行ったのはウクライナ軍である』投稿者：かたせ2号
投稿日：2022-04-29

かたせ2号です。

P i c k U p さんのツイートから。2022年4月

27日のツイート

[https://twitter.com/pickup_topic/
status/1519324385739698177](https://twitter.com/pickup_topic/status/1519324385739698177)

(引用開始。下線部はかたせ2号が引いた)

詳報『ブチャヤの大虐殺を行ったのはウクライナ軍であ
る』

ウクライナの法医学者による解剖で、ブチャヤ市民を

殺したのは、ウクライナ軍であることが明らかになりました。スレッドに詳細なレポートから要点に絞って翻訳でまとめます。是非お読みになって拡散して下さい。

<https://mpr21.info/fue-el-ejercito-ucraniano-quien-cometio-la-matanza-de-bucha/>

(MP R 21 というスベイン語サイトで2022年4月26日に配信された記事)

ブチャでの虐殺についてメディアは突如沈黙した。

この沈黙は、フランス国家憲兵隊が関わる捜査で、遺体から金属製の“ダーツ”が発見されたからである。
この金属製の“ダーツ”が決定的な証拠となり、虐殺はロシアが行ったというプロパガンダがピタリと止んだ。

解剖を行なったウクライナの法医学者ピロフスキ氏は「私達はこの地域の同僚と、遺体から金属製のダーツを発見しました。こういった遺体は、ブチャだけでなく、イルピンでも同じです。このダーツは、細か過ぎて遺体から探し出すのは大変なんです。」と語る。

この“ダーツ”とは、2014年以降、ウクライナ

軍によってドンバス市民に対して広く使用された、無差別殺傷兵器である。

ルガンスク軍は、放棄されたウクライナ砲兵陣地から、このダーツが使われている122mm D-30砲弾を発見した。

“ダーツ”は2015年のウクライナ軍によるドンネツク人民共和国のスラヴァイアンスク市でも発見され、当時は大きく報道されたが、例によって、すぐにメディアに緘口令が敷かれた。

砲弾1発で8000本のダーツを発射する榴散弾の一種で、戦手法違反の無差別殺傷兵器だからである。

このD-30砲弾は今紛争でロシア軍は使用しておらず、ましてやブチャで活動した空挺部隊は、そもそもそのような砲弾は扱わない。

“ダーツ”は通常約4cmで、人体に当たると、4枚フィンが付いた本体がフック状に折れ曲がり、それによって突き刺さるのではなく、人体を引き裂きながら破壊する。

紛争当初からウクライナ軍は、ゾナクザルナヤ通りのロシア軍に砲撃を加えていた。この砲撃で、市内の

いくつかの地区が一度に破壊された。3月末、ロシア軍撤退の数日前に再び砲撃し、ロシア軍がキエフとチェルニヒフを離れると同時に、さらに砲撃を繰り返した。これが“虐殺”の真相である。

解剖の結果、民間人は明らかにウクライナ軍のD-30砲弾によって死亡したことが明らかになった。同様に、死体の散乱位置などの分析からもこれが証明された。

そもそもズチャに配備されたロシア軍は、自軍に向かって砲撃を加えていないのだから自明の理である。

ズチャ、ホストメル、ボロディンカで独立した兵器専門家が証拠を収集し、分析した結果、この地域では民間人に向かってクラスター弾とミサイルが使用されたことが判明している。大勢の民間人を殺害したこのような兵器は、世界のほとんどの国で禁止されている。

フランス国家憲兵隊の法医学部門の専門家18人と、キエフの法医学調査チームが調査した結果、両手を縛られて銃などで殺害された遺体には、そのクラスター爆弾のパーツが埋め込まれたケースがあった。

イギリスの専門家によると「非常に珍しい爆弾。米

軍の対人弾シリースのもの」だという。

“ダーツ”はWW Iで広く使われたが、WW Iではあまり使用されなかった。

ベトナム戦争では米軍が乱用した。ガザやレバノンの戦場でイスラエル軍が濫用した。

市民の居住地域でこのような無差別殺傷兵器を使用することは、明確に戦争法違反である。

(引用終わり)

YouTubeでは、「ウクライナ・オン・ファイヤー」(英語: Ukraine on Fire)、イゴール・ロパトノク監督による2016年のドキュメンタリー映画、製作総指揮はオリバー・ストーンや、また、「オデッサの悲劇」(harano timesさんの字幕あり)をみることができる。

以下、「篠原常一郎のインターネットリジェンス・ウエブサイト」0428より。《伏せ字〇〇は、有料メルマガ会員のみ閲覧可能となっている。》

(引用開始)

ウクライナ情勢、日々テレビ報道でも流れないことはないのですが、現地情報をリアルタイムでトレスしてくる限りでは、日本で取り上げるのは2～3日遅れが通常です。ですから、日本で伝わる時にはもう現地で状況が変わっていることが多いですね。

しかも、ウクライナ側⇒西側報道機関の伝言ゲーム・ルートだけを無批判・無検証で垂れ流すので、内容的にもプロパガンダを真に受けた不正確なものばかりです。今回の軍事侵攻はロシア側のあまりに無謀な姿勢が開始後の経過からも明らかですが、2014年以来蓄積されたウクライナ現政権側の残虐行為や道理の通らない停戦合意（「ミンスク合意」）違反などが現在の紛争の様相に大きな影響を与えていることは完全に無視されています。

しかし、同時に日本の政治の中でも、野党までがこそぞってほんの数年の歴史すら振り返らず、表面的な報道のみを根拠にウクライナ紛争を見るのがトレン

ドであり、その筆頭が日本共産党であるというのが痛いところですよ。ネオナチがクーデター後に参加したウクライナ政権の犯罪的な行為などには全く目もくれず、日々ロシアへの非難と募金集め（おそらく一部を自分たちの財政に繰り入れ）による「ウクライナ支援」を党員たちを駆り立てながら展開しています。

(中略)

ロシアのウクライナに対する軍事侵攻（2月24日～）は、決してそれ単独、唐突に起きた事象ではない。1991年12月のソ連邦崩壊以前にまで遡る歴史的背景もあるが、直接的につらなる事情は2014年2月の「マイタン革命」やその後のウクライナ内戦の事態の継続から連鎖して起きたものだ。

特に「マイタン革命」のクーデターにより成立した現政権につらなる政治勢力が追放したヤヌコビッチ大統領の後任大統領を選ぶ前から「ロシア〇の〇〇〇」排除を打ち出したことが混乱の直接的要因として大きな比重を占める。実際に〇〇〇〇〇〇の国民の圧迫が東

部と南部のウクライナでの騒乱につながりドネツクとルガンスク両州（いずれもロシア語話者住民が7～8割）がキエフ政権からの分離・独立を主張し、それぞれ「ドネツク人民共和国」「ルガンスク人民共和国」を宣言して、ウクライナ政府軍の軍事攻撃への抵抗を開始し以後8年に渡る内戦が続いてきたことが、この度ロシアが「特別軍事作戦」と称してウクライナに対する軍事攻勢に踏み切る火種になったことが〇〇〇〇かつ〇〇に事態を追いかけた人には、明白な事実である。

（中略）

こうした〇〇・〇〇〇〇〇〇〇〇による〇〇行為やウクライナ政府軍による〇〇〇〇〇で、東部ウクライナ地区を中心にこれまでに1万6千人以上が犠牲になっている。犠牲者の多くが非〇〇〇の住民たちである。

以上のような「国民分断」策、一種の「民族浄化」政策が現在まで続くウクライナの混乱を生み出す根本要因だ。ところが「科学の党」を標榜する日本共産党は、こうした事情を一顧だにせず、ひたすら単純に

「軍事侵攻したロシアが悪い」の一点張りである。

我が国のマスコミ報道も「ロシア悪し」ばかりという点で大差はないのだが、わずかとはいえ独立系ジャーナリストの現地報道やきちんと事実分析を行なう論者などの発信によって空気がやや変わってきている。ロシア軍、ドネツク人民共和国軍の攻勢で陥落したマリウポリでも、同地がもともと「アゾフ大隊」による暴虐で平定され攻防戦の中で市民を「人間の盾」にする非人道ぶり（西側報道の多くは罪をロシア側になすりつけている）の経過が明らかになり、住民の大多数もロシア側を「解放者」として受け止めていることなどから、日本共産党も先頭に立ってふりまいてきた大ウソがバレつつある。

（参考映像）「ウクライナの砲弾で家を持った家族」

2022/4/16 Mayo ※元米海軍軍人のジャーナリス

ト・ランカスター氏がマリウポリ周辺で発信した現地ルポを日本語字幕翻訳して配信しているアカウントです<https://youtu.be/BSSW18WdoWc>

（引用終わり）

あとがき

◆「雑記」で引用してきた武田邦彦先生や、松田学氏らが立候補している参政党の街頭演説が熱い。日本だけが30年も失われた原因などがわかるかも。視ておいて損はないので、YouTubeで。(J)

◆ロシアによるウクライナ侵攻から3ヶ月が過ぎた。得る情報は片方側からのものでしかないが、何かを書きとめておきたいと思っていた。しかし、なかなか言葉が見つからない。書き出しても軽々しく思えて次行が続かない。書いては消すということを繰り返すうちに、言葉は着飾りのない単純なものになった。この種テーマも直截的な表現も、もしかして自分にとっては初めてかも知れない……。ありきたりの言い方だが、早期終戦と多くの人びとの平穏な日常が早く戻るよう願っている。(B)

◆最近、目が疲れやすくなった。十二年目のレンズは微細なキズだらけ、コーティングも剥げてきた。で、眼鏡店へ。精密機械を覗かせられたり、テスト用レンズを何度となく入れ替えて試すうちに、直前の見え方との違いが分からなくなり、いい加減疲れてきた。まあまああところで妥協した。さあ、これでなにを見る。(S)

◆昨年11月、所要のついでに埼玉県所沢市にある、建築家阿部勤の自宅を見に行った。「中心のある家」という彼の著書で知り、コンクリートで出来た正方形の部屋の外側に木造の周辺部があり、自宅として40年以上住まわれているという。広い敷地ではないのだが、庭木も成長して調和しているように思われた。著書の中に「古くて正しいものは、永遠に新しい」という言葉が印象に残った。(T)

「海市」第28号

2022年6月11日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方